2015年(平成27)7月1日発行(年6回1・3・5・7・9・11月1日発行)通巻第118号

本郷

2015.7　NO.118

ミュージアム・コレクション 原爆の図　丸木美術館　岡村幸宣
百話百言 戦後70年と歴史の岐路　木畑洋一 1
対談 軍隊と戦争 2
原田敬一 × 吉田　裕
〈文化財〉取材日記 負の歴史と向き合えるか　小坂洋右 12
北行伝説の中の義経と静　前川佳代 15
伊勢神宮の公共性　ジョン・ブリーン 18
歴史のヒーロー・ヒロイン 真田幸村　立川談慶 21
明治時代史大辞典ウォーク 昭和天皇実録に見る明治(1) 22
神屋寿禎は石見銀山の発見者か？　本多博之 24
明治期の肖像写真とその課題　研谷紀夫 27
中世武士の肖像 阿波粟田氏　野口　実 30
「公家悪」の背景を読み解く　岡野友彦 33
趣味の大衆化の行方　神野由紀 36
「定説」の行方　中橋孝博 39
対談 変わる！　東北史像 42
熊谷公男 × 柳原敏昭

吉川弘文館

戦後70年を問う

二〇一五年(平成二十七)七月一日発行　年六回一・三・五・七・九・十一月一日発行
本郷　第118号
定価二〇〇円(本体一八五円)
一年分一〇〇〇円(送料共)

戦後70年―。
"あの戦争"とは何だったのか？
アジア・太平洋戦争辞典
吉田　裕・森　武麿
伊香俊哉・高岡裕之 編
2015年10月発売
戦争体験の継承や歴史認識をめぐる摩擦が問題となる今日、アジア・太平洋戦争をあらためてとらえ直す本格的辞典。満洲事変から東京裁判、サンフランシスコ平和条約などの戦後史まで、政治・軍事・外交・経済・文化・思想など約2500項目を、図版を交え平易に解説する。軍事専門用語や兵器、諸外国の事項や人名も多数収めた。付録と索引を付す。
四六倍判・上製・函入・800頁予定
本体予価二五、〇〇〇円
978-4-642-01473-1
満洲事変、日中戦争から東京裁判、サンフランシスコ平和条約まで、
今を生きる私たちが
あらためて問い直すための
本格的〈戦争〉辞典！
〒113-0033・東京都文京区本郷7-2-8
電話 03-3813-9151〈代表〉
吉川弘文館
2015年版『出版図書目録』送呈
FAX 03-3812-3544／表示価格は税別

発行者＝吉川道郎　発行所＝株式会社 吉川弘文館　〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151代表　FAX.03-3812-3544　振替口座00100-5-244
印刷所＝株式会社 平文社
©吉川弘文館　本誌の記事は無断転載をお断わりします
吉川弘文館のホームページ http://www.yoshikawa-k.co.jp/

『東北の古代史』『東北の中世史』刊行記念対談

変わる！ 東北史像

熊谷公男（くまがいきみお）

一九四九年、宮城県に生まれる。一九七九年、東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、東北学院大学文学部教授

〔主要著書〕『日本の歴史03　大王から天皇へ』『古代の蝦夷と城柵』など多数

柳原敏昭（やなぎはらとしあき）

一九六一年、新潟県に生まれる。一九九〇年、東北大学大学院文学研究科博士後期課程中退。現在、東北大学大学院文学研究科教授

〔主要著書〕『中世日本の周縁と東アジア』『鎌倉・室町時代の奥州』（共編著）など多数

三・一一を越えて

――本日は、この六月から刊行される『東北の古代史』『東北の中世史』の刊行記念対談ということで、企画編集委員のお二人にお集まりいただきました。

今回の企画は、実は二〇一一年三月二二日に、一回目の打ち合わせを予定していましたが、ご存じのとおり東日本大震災が起き、会議ができませんでした。その後、その年の七月に柳原先生の研究室にお邪魔して、「東北の歴史の特質や源流を探る通史的な企画を進めましょう」と改めてお話ししたのが本シリーズの始まりです。まずは、三月一一日をどのようにむかえたか、柳原先生からお話しいただけますか。

柳原　私はある科学研究費助成事業の調査で、沖縄県の久米島（くめ）にいました。調査の最終日で、久米島から那覇空港、那覇空港から仙台空港という経路で、その日のうちに帰ってくるつもりだったのです。ところが久米島空港の最終待ち合わせロビーで地震の発生を知り、何が起こっているのかよく分からないままに、とりあえず那覇空港を経て福岡へ飛びました。その後、しばらく新潟県の実家にいて、仙台に帰りついたのは一週間後です。

熊谷　へえ、そうだったんですか。私も実はあのとき福岡にいました。重なっていますね。私は、地震が起こる直前まで仙台空港にいて、二時一五分か二〇分くらいに、福岡行きの飛行機に乗って離陸しました。だから、地震は空の上にいるときに起こりました。

柳原　仙台空港にも津波が押し寄せていますから、危機一髪でしたね。私ももう少し早く久米島を出発していたら危いところでした。

熊谷　私が福岡に行ったのは、翌日にある福岡市史の古代専門部会の会議に出席するためでした。ですから、まったく知らずに福岡空港に着いて、ホテルへ行って何気なくテレビをつけたら、津波や、仙台空港のものすごい映像が出てきました。夜になって、自分の身が危なかったと思い、改めてぞっとしました。

翌日、市史の会議に出たあと、ホテルでニュースを見ていたら、伊丹（いたみ）空港（大阪市）から山形に臨時便が飛ぶという情報を知りました。「あっ、これで帰れるんじゃないか」と思って、予約をしたんです。次の日の朝、博多の駅から新大阪まで新幹線で行って、予定どおり一一時の便に乗ることができました。それで、伊丹から山形に飛んだら、山形空港から仙台行きの臨時バスが出ていました。ただ、高速はさすがに使えなかったようで、一般道を走って、仙台に夕方の五時くらいに着きました。

でも結果的には、二人ともあの揺れは体験していないということになりますね。

柳原　そう。何となく後ろめたいものがあります。

――今回の執筆者で被災された方はいらっしゃいますか。

柳原　みなさん多かれ少なかれ被害を受けていらっしゃいます。中には、津波で自宅が流され、ご家族が危険な目にあわれた方もいらっしゃいます。

――こういうお話をうかがうと、今回のシリーズは学問の震災からの復興という意味をもつことにもなりますね。

災害史を考える

――三・一一以後、災害史研究が一つの大きなテーマとして出てきます。記憶の継承といいますか、そういった意味で、今回の本でも弥生時代や貞観（じょうがん）（平安時代前期）の地震を扱っています。

熊谷　そうですね。やはり震災の後、自治体の担当者は、発掘調査のとき、津波痕跡に非常に注意するようになったそうです。今回の震災が契機となって、実態がより分かってきているようです。

柳原　中世の方でも、第五巻で慶長地震をとりあげています。

――津波という意味でいくと、貞観から慶長までは特に大きなものは計測されていないのですか。

熊谷　中世にはそんなにありませんでしたか。

柳原　享徳三年（一四五四）に陸奥国で津波被害があったという史料があります。もっと研究すれば出てくるかもしれません。とにかく、歴史研究者が、三・一一以前は災害にあまり関心を持っていなかった。

熊谷　そう。例えば東北古代史の簡単な年表には、貞観地震が入っていないものもあります。ただ、多賀城では全体的な建て替えを四回していて、そのうちの最後の第Ⅳ期が貞観地震の後に違いないということが、震災のずっと前から分かっていました。

柳原　むしろ在野の研究者の方が、貞観や慶長の時、特に平野部にも津波の被害が及んでいることを本に書かれていて、宮城県や仙台市に「危ないから対策をとるように」と陳情もされていたのです。震災の前ですよ。だから本当に、歴史研究者が過去の事例に非常に鈍感だったということが改めて感じられます。

熊谷　確かに、それは率直に認めざるを得ませんね。

柳原　震災自体の研究もそうですし、復興過程の研究も必要です。慶長地震でいえば慶長遣欧使節、つまり支倉常長の派遣が、津波の復興策だったのではないかという説などもあります。

熊谷　そうなんですか。

柳原　あるいは、奥州街道・浜街道という宮城県の太平洋岸沿いを通る近世の街道の宿場を見ると、津波が今回来た線よりも内陸側になっているから、慶長地震の経験を生かしてルートを作ったのではないかといった議論も出ています。

一方で、最近、あらゆることがらを地震や震災復興につなげるような傾向があるけれども、冷静に史料的根拠を確かめて評価すべきであるという議論も出始めています。

熊谷　揺り戻しですね。

柳原　もちろん問題意識として、震災研究や復興過程の研究をきちんとしなければならないという根幹の部分が、動いているわけではありません。ただ、評価自体は、少し冷静になったほうがいいのではないかという議論も出ているということです。

熊谷　古代でいうと、貞観地震の記事が『日本三代実録』にあるのですが、復興過程は文献史料からはほとんど分かりません。これは考古資料では、特に多賀城の発掘成果から考えることが、やはり震災の後に行われています。特に精力的に研究されているのが、三巻で執筆されている佐川正敏さんですね。貞観地震以降は多賀城の第Ⅳ期という時期になるのですが、非常に独特な新羅系統の瓦というものがでてきます。

実はちょうどこの地震のころに、北九州に新羅の海賊がやってくるようになって、彼らが捕まります。それで全国の何箇所かに海賊だった人を移住させて、東北や陸奥にも新羅人が、数十人規模ですが、来ていました。陸奥に移住させられたその新羅人の中に、瓦工人がいたのです。これは文献史料に出てきます。だから新羅系統の瓦が出てくるのは、元海賊かは断定できませんが、その流れで来たのです。

柳原　おもしろいですね。

熊谷　その瓦が、多賀城だけではなく陸奥の国分寺でもかなり出ているということです。しかも国分寺のほうが量は多いらしく、そうすると貞観の地震のときの被害も、国分寺のほうが大きかったのではないかという議論もされています。このように瓦を通して、震災後の復興などの研究が行われています。

柳原　やはり瓦は編年がありますから、すごく分かりやすいですね。

熊谷　ええ、物差しになるわけです。しかも系統も分かるので、単なる物差しではなく技術の系統や、窯が見つかればこの窯で作られたものがこのように供給されたということもいえます。実際には、仙台市内で焼かれたようです。仙台第三高等学校のそばの与兵衛沼の辺りで瓦が見つかっていて、そこで焼かれたのではないかといわれています。

――その都度、人々は立ち上がって、復興に向かいますよね。

柳原　ただ、一般民衆の被害に対して権力が何か救済措置をとったということは、ありますか。

熊谷　古代はあります。律令国家では、飢饉のときなどに賑給という稲穀・布・綿・塩などを支給する救済措置が取られていました。

柳原　飢饉ではやるでしょうけれど、震災もあるのですか。

熊谷　震災のときも、実は、『日本三代実録』に出てくるのですが、被害状況を調査する使者を派遣し、国司とともに被災者の救助にあたるように命じています。ですから、どの程度の救済措置が取られたかははっきりしませんが、ある程度はやっていると思います。

資料ネットの活動

――歴史資料保全ネットワークについてうかがいたいのですが。

柳原　宮城資料ネットは、現在、宮城学院女子大学の学長をされている平川新さんたちが立ち上げられたもので、研究者・学生と自治体・博物館などをネットワークで結んで、災害時の歴史資料の保全をはかろうという組織です。三・一一の前にNPO法人になり、様々な活動をしていました。ただし宮城県沖地震は必ず来るとみんなが念頭に置いていましたが、津波が押し寄せるとは考えていませんでしたね。まして原発事故というのは思いもよりませんでした。

熊谷　それこそ想定外ですよね。資料ネットは、現在具体的にどのような活動をしていますか。

柳原　基本は被災資料の救出、そしてそれが後々まで保全できるように措置を講じます。海水をかぶった史料を保全するというのが、これまで経験のないことで、試行錯誤の連続だったようです。その後は整理作業があります。大変な仕事です。宮城だけでなく、岩手・山形・福島でも、また隣県では茨城・新潟でも資料ネットが結成され、活動しています。今回のシリーズの執筆者の中にもがんばっておられる方が何人もおられます。私なんぞは、震災直後はレスキューに何度か参加したものの、その後はご無沙汰している方です。

熊谷　なるほど。

柳原　それから関連して、震災の記録をちゃんと残しておかなければならないという課題があります。東北大学では、災害科学国際研究所が中心となって震録伝というプロジェクトを運営しています。また、学生・教職員の体験談を集めた本も出しています。海外では、ハーバード大学が日本の色々な機関と連携して、「東日本大震災デジタルアーカイブ」を立ち上げています。後でも話題にしますが、昨年（二〇一四）一〇月に開かれた東北史学会大会で、このアーカイブの中心を担われているアンドルー・ゴードンさんが講演されました。

熊谷　それはやはり文書、文字資料の記録が主体ですか。

柳原　画像・映像も対象となっています。インターネット上の情報も保存しています。

熊谷　なるほど。今はもう、いろいろな人が携帯などで写真や動画を撮っているので、膨大な量でしょう。画像や映像を集成すれば貴重な資料になると思います。

――実際に震災が起きたとき、どの場所に重要な資料が残っているかということをお互いに連携を取って知ろうというのが、資料ネットの思想ですよね。

柳原　そうですね。資料ネットの初期は、まさにレスキューだったのですが、宮城の場合、平川さんたちが早めに気付いて、自治体等と協力しながら、どこに資料があるのかということを平常時に把握しておいて、災害が起こったらそこに行くというシステムを作ろうとしていました。三・一一はその途上で起きてしまったということになります。それでも効果はあったようです。

熊谷　東北学院大学の博物館もさまざまな活動をしています。石巻市に合併されたクジラの町・鮎川の「石巻市鮎川収蔵庫」が津波で被災してしまいました。その後、そこに民俗学と考古学の先生や学生が入って、レスキューしました。特に民俗資料がたくさんあったので、脱塩などを行い、考古資料も資料館が復興するまでこちらで預かることにしました。

そのときから鮎川と私たちの大学博物館につながりができて、レスキューが始まったのです。その後もずっと連携して調査をしていますし、様々な交流もしています。

柳原　津波被災地ではありませんが、後でお話しする、恐らく近年最大の発見である宮城県白石市の遠藤家・中島家文書も、宮城資料ネットの活動の中で発見されたものです。この文書群については中世の四巻にコラムが設けられています。

熊谷　また文化財にかんしていうと、注目は震災の後の高台移転や、仙石線や常磐線の付け替え工事ですね。少し内陸のほうに路線を移すことが、現在行われていて、要するに工事のさい遺跡が見つかるわけです。文化財や遺跡があるところは文化財保護法があって必ず調査することになっているので、宮城県が中心となって市町村も当然関わってきます。今は発掘が、通常のときとかなり異なるパターンになっていて、非常に件数も増えています。そして全国の自治体から、文化財の専門職員が応援に来ている状況です。その中で、去年のことでいえば宮城県の山元町で重要な発見がありました。常磐線の敷設にともなう事前調査で、古代の時期の官衙（かんが）の遺跡が三つくらい見つかりました。役所跡や木簡・製鉄遺跡、横穴墓なども見つかって、重要な発見があり話題になっています。

柳原　おもしろいですね。中世関係も、岩手県の沿岸部では城郭の大規模調査が行われています。

熊谷　城郭と縄文遺跡ね。高台移転するので、農耕や治水と関係のない縄文時代のものが見つかる。

柳原　それから結構沿岸部で、平泉と関係するような遺跡が見つかっています。たとえば岩手県宮古市の田鎖（たくさりくるまどうまえ）車堂前遺跡では、一二世紀のかわらけや中国製白磁、鎧の小札などが出ています。板碑や経塚の調査とか、震災復興絡みのものはかなり多いですね。

震災後の東北史

柳原　すこし話をかえますと昨年（二〇一四）一〇月に史学会、東北史学会、福島大学史学会の三者合同で、「東北史を開く」というテーマでシンポジウムを行いました。

熊谷　その「開く」の意味を、もう少し具体的に教えていただけますか。

柳原　実はそこが準備会を重ねる間にいろいろ変わってきたところなのです。最初は、外国史との比較を中心に、「開く」という意味を考えたのですが、やはり、震災を避けて通ることができなくなってきたのです。例えば震災後に「東北が被災地である」とか、スローガン的に「がんばれ東北」とさかんに言われました。その意味を考えていくと、東北という枠組みとは一体何なのだろうという話になってきました。身近な例でいえば、同じ仙台市でも沿岸部と市街では被害が全然違いますよね。

熊谷　状況はまるで違いますね。それはそうです。

柳原　「私は被災者なのだろうか」という疑問が湧いてくるわけです。

熊谷　それは確かに私もありました。

柳原　津波の被害の現場に行っても、高低差でこちらは津波の被害を受けているけれど、道を隔てたら大丈夫だったり、ものすごく差がありますよね。

熊谷　ちょっとしたところでね。

柳原　ミクロのレベルではそのようなことに気づきますが、マクロではたとえば東北が被災地だといっても、やはり山形や秋田はだいぶ状況が違いますよね。

熊谷　それはそうですよね。

柳原　逆に、茨城や千葉は相当な被害を受けています。そういった中で、「東北が被災地」や「がんばれ東北」といった言い方でくくってしまってよいのか。言いかえれば、東北という閉じた枠組みで考えていてよいのかということになりました。東北の中でもさまざまな地域があるということと、東北の内と外で明快に線が引けるわけではないということ、これを歴史学的に考えていく。北は北海道、南では関東との関係、あるいは新潟県との関係などという意味で、東北という枠組みを相対化して、内にも外にも開くというのがだんだんテーマとして浮かびあがってきたのです。

熊谷　今の話を聞いていて少し思ったのは、結局、「東北がんばれ」というのは東北以外の人が言うわけですよね。だからそうなってくると、東北人だけの責任ではなく、日本人全般が持っている東北に対する認識というかイメージが一番ベースにあって、東北ひとくくりという発想になってくるという。だからある意味、東北だけの問題ではないという気が少ししました。

柳原　そうですね。それからやはり、福島の原発ですね。東北史学会のシンポジウムで原発事故をメインにした報告はありませんでしたが、やはり事故を起こした原発が、電力を首都圏に送っていたという事実は重い。

熊谷　福島にあるけれど、会社は東京電力だからね。

柳原　そうすると、首都圏と東北、もう少し普遍的にいえば中央と周縁という問題を、やはりあらためて考えるべきだということになりました。先ほど言った東北という枠組みの相対化の問題と、中央と周辺と

いう問題が、シンポジウムの中では強く意識されたのです。

『東北の歴史』から四八年

――このシリーズを企画するうえで、前提になっていますのが豊田武編『東北の歴史』（小社刊、一九六七年）です。各項目がかなり細分化され非常に多くの方が執筆されています。

熊谷　はい。今思えば執筆者もすごいメンバーですね。

柳原　中世では入間田宣夫先生が一番若いのかな。執筆当時、まだマスター（修士）のはずです。

熊谷　古代だと工藤雅樹先生が当時新進気鋭でしたね。

柳原　豊田先生のはしがきを読むと「東北大学の国史学科創設四〇周年を記念して、この学科に関係のある方々の熱心な協力によって編まれたものである」と書いてある。東北大学の日本史研究室、昔の国史研究室の同窓会学会を国史談話会というのですが、執筆しているのはそのメンバーがほとんどです。ごくまれに、そうではない方も入っています。それに対して今回のシリーズの執筆者は、国史談話会や出身大学とは全く関係なく、中堅と若手を中心に構成しています。その意味では、根本的に違いますね。

――本シリーズの古代史の部分で『東北の歴史』からの一番大きな変化について聞かせてください。

熊谷　まず研究の流れでいくと、『東北の歴史』以前の大戦後、「東北史は、例えば稲作が早い段階で津軽まで行っている」というようなことから始まって、「蝦夷は異民族ではないのだ」、という見方が生まれます。基本的には倭人（日本人）と一緒だけれども、辺境に住んでいたために中央から野蛮視されていただけで、異民族ではないという見方が、稲作が早くから入ったことが一つのきっかけになって広がります。「辺民説」というものです。

『東北の歴史』の段階では、高橋富雄先生が書かれていますが、手短かにいうと、中央との同質性を強調しようとする思考なのです。だから蝦夷に関しては辺民説、それから城柵の研究が盛んになってきます。城柵というものは、以前は蝦夷を征伐する砦だと捉えられていましたが、そうではなく多賀城は役所なのだというふうに変化します。国府が置かれているし、国司も来ている。国府のような役所は全国の各国々に置かれているから、それと基本的には変わらないのだと。

柳原　それは全国的な現象ですからね。

熊谷　全国共通だという側面を強調する流れが、やはりこのころを境にして出てきます。蝦夷に関しては以前からあるのですが、城柵に関しても多賀城などの発掘が本格的に始まると、そのような考えが出てくるのです。そして、それが主流だったところに、同時にいわゆる「続縄文文化」の遺跡がだんだん分かってきました。それが弥生末期の三世紀から六世紀くらいまでですが、おもしろいのは住居祉が見つからなくて、お墓だけ見つかるのです。

――通常その前後の時代は、竪穴住居が作られるので柱痕が遺りますよね。

熊谷　そうです。地面を掘りくぼめるわけですから、そこが遺構となって見つかるわけです。ところが、実は同じ時期の北海道も同様の状況だそうで、お墓は見つかるけれども竪穴住居はやはり見つかりません。続縄文の後半期なのですが、それがどうも東北へも入ってきた。土坑墓という、平面が楕円形の地面を掘ったもので、屈葬なのです。直径が一メートルくらいなので、普通に伸展葬にするとつかえてしまうようなものなので、そう考えられます。

――縄文時代にみられる抱石葬はありますか。

熊谷　石は直接見つかりません。でも物理的に無理なので、丸める形で葬ったに違いないと思います。古墳時代の文化では完全に伸展葬だということを考えますと、要するに、縄文時代以来の伝統がやはりまだあって、北のものが入ってきたことがだんだん分かってきて、それが大きなインパクトを与えました。北の影響がそのように考古学的に確認されるのです。

ただ難しいのは、その時期が六世紀くらいまでなのですが、その後なくなってしまうと、古墳時代の土師器や須恵器がわあっと広がります。それから七世紀くらいになると、北海道で擦文文化の時期になります。擦文土器というものは考古学者の一致した見解のようですが、それ以前は続縄文土器なわけです。その続縄文土器が、土師器の影響を受けて変化して、擦文土器になるのだと考えられています。つまり、南からの影響が北海道まで行っているのです。北海道でも、それまでは竪穴住居を作らない時期がありましたが、このとき、また竪穴住居を作るようになったのは、明らかに南からの影響で、かまどで煮炊きをする竪穴住居が北海道まで広がります。北の文化が下りてくる時期のあと、また南の文化がわあっと北海道まで行くというようなことが、考古学的にだんだん分かってきました。

ちょうど南の文化が北に広がる時期が、いわば蝦夷の時代の始まりで、七世紀以降にあたります。このようなことが考古学的に分かってきたので、これらの基礎研究をベースにして、蝦夷のことも考えていかなければなりません。だからその直前までは明らかに北の文化の影響が、東北地方北部（宮城県の一番北くらい）まで及んでいたのです。そのような事実が、『東北の歴史』の時代には全く分かっていなかったことなので、古墳時代に相当する時期の東北地方の歴史や、あるいはその後の歴史も含めて、書き換えが進んできている状況だと思います。

だからそのような意味では、特に『古代史』二・三巻では、ここ三〇年くらいの考古学的な調査研究によって、それ以前とはかなり捉え方が変わってきたということになると思います。

――そのつながりで見ていきますと、やはり古代蝦夷が七世紀ごろに成立して、防御性集落の時代などを経て、一一世紀の前九年・後三年合戦につながっていきます。阿倍、清原氏が陸奥・出羽で勢力を強めてきて、武士の先駆けといえるでしょう。阿倍、清原氏のルーツについては、どのように考えたらよろしいのでしょうか。

柳原　血統的には、やはり中央から来ていても全然不思議ではないですよね。

熊谷　その辺は、古代史でも意見が分かれていますね。難しいのは、清原はともかくとして阿倍というのは陸奥にもどんどんできてくるのです。改氏姓といって、新しい姓をもらうことによって、例えば阿倍安積臣など、複姓と呼ばれますが、阿倍の

ついた姓が奈良時代にかなりたくさん、一斉にでてくる。

陸奥国牡鹿郡に道嶋嶋足という大立者が出ますが、中央で出世する人が仲立ちして、おそらく征夷で活躍していろいろなご褒美をもらったような新興豪族層が、雨後の竹の子のようにいっぱいできてくるのです。そのような人たちは、もともとは豪族というよりは有力農民クラスだったので、姓が、奈良時代の普通の公民の姓はみんな「〇〇部」なのです。だから彼らもほとんど、大伴部や丈部などの姓を持っていました。

でも、征夷などで活躍すると位がもらえますから、それに伴って軍の役職などに就くわけですよね。そうすると、それなりの地位に就いているのに姓はまだ一般農民と同じなので、格好がつかない。おそらく上がった地位に相応した姓が欲しいという要望が出てきて、道嶋嶋足が仲介して、いっぺんにたくさんの人たちが新しい姓をもらったということが、奈良時代の後半にありました。その中に阿倍という姓がかなりあるのです。ただし、先ほども言った阿倍安積臣のように阿倍の下に本拠地の地名が付くタイプの姓がかなり広がるのです。

ただ、さすがに平安時代辺りまでに、地元の人が清原を名乗った例は見つからないのではないかと思います。

――やはり朝廷側と婚姻関係を結びながら、彼らは自分たちの地位を補強していったのでしょうか。

熊谷　朝廷というより、要するに下向してきた国司などを婿養子のようにしていったということでしょうね。

北方史研究という視点

――中世史の方は、いかがでしょうか。いま蝦夷の話が出ましたが、そのあたりから。

柳原　『東北の歴史』上巻は、一九六七年に初版が出て、七九年に改訂されます。じつはその間に『中世奥羽の世界』（東京大学出版会）が刊行されています。中世史では、この『中世奥羽の世界』が学史を画するような成果といえます。東北の中世史で古代のエミシとは区別されたエゾが本格的に問題とされるのは、七〇年代後半のことです。『中世奥羽の世界』では、あとがきで「蝦夷問題を叙述に取り込む」ことに留意したとはっきり述べられています。『東北の歴史』初版の中世部分にはエゾは出てこないのですが、改訂版は『中世奥羽の世界』以後の刊行ですので、その成果を取り入れ、エゾについて増補されています。奥羽の先に北海道があり、そのことを意識して東北中世史を再構成しようという観点が出てきたのも『中世奥羽の世界』に結実するような成果が出された七〇年代後半です。あと、『中世奥羽の世界』では、「制度的な史実の確定を、最新の成果にもとづいてきちんと行う」ことにも留意したとあとがきにあります。

熊谷　エゾの話と制度的な史実の確定の話は、関連するのですか、別個のことなのですか。

柳原　『中世奥羽の世界』では、行政制度が詳細に検討された結果として、中世陸奥・出羽の郡・荘・保一覧図が掲載されています。のちに大石直正先生が、陸奥国の荘園公領を俯瞰して、陸奥を四つに区分できるという論文を書かれますが、その基礎となるような史実が確定されたといってよいでしょう。こうした研究を参照すると、エゾが居住していた東北地方北部は、地域編成のあり方が南の方とは大きく違うということがわかります。こいうところでエゾの問題と制度の問題とがリンクしてくるかと思います。でも、地域区分の話は、熊谷先生も結構早くからされていますよね。

熊谷　あとは亡くなられた今泉隆雄さんが、かなり精緻にされましたね。日本考古学協会の大会で報告されました。一九九一年のことで、その後『北日本の考古学』という本にもなっています（吉川弘文館刊、一九九四年）。

柳原　あれは大切な研究ですね。中世史にもかなり影響を与えました。

――ところで、本シリーズで北緯三九度線というものが繰り返し出てきます。このラインは、どういう意味で重要なのですか。

柳原　荘園が存在する北限がちょうどそのあたりなのです。そこから北には荘園がない。中世が荘園制の社会であることを考えたとき、日本国の中で荘園の有無で線が引けるというのは注目すべきことです。ちなみに南の方は種子島まで荘園があります。

熊谷　三九度というと平泉辺りですか。

柳原　そうです。ただ注目されるラインは、三九度だけではありません。四〇度ライン、秋田市や盛岡市のもう少し北ですが、これも注目されています。それ以北がエゾの居住地であり、北海道と非常に関係が深い地域ということになります。

熊谷　時代によってそのようなラインは動くと思うのですが、古代だとよく言われるのは、アイヌ語地名のラインが日本海側では山形と秋田の境で、そこから北は密度が濃い。太平洋側はやや南で、宮城県の北です。登米はアイヌの地名だといわれていますし。それが実は、そのラインがほぼ、古墳の北限でもあるのです。それより北は、先ほどの続縄文文化のような伝統というか、名残りが恐らくあったのではないかという感じがします。

虎尾俊哉さんが初めていわれたと思うのですが、そのラインを越えて城柵を作った途端に蝦夷がわあっと抵抗するようになったのだと言われています。そのラインを越えた城柵というのは、桃生城や、伊治城などです。それより北だということで、奈良時代後半にそのラインを陸奥側で越えるのですが、途端に戦乱の時代になっていきます。ですから、かなり当たっているのではないかと思います。

私たちが一番意識するのは、少なくとも奈良時代から平安時代の初めくらいにかけてはそのラインです。ですから、先ほどの話よりも少し南になるのでしょうか。

――一九八〇年代の後半には北方史あるいは北からの日本史と言うことが盛んにいわれましたが。

柳原　そうですね。一九八六年に北海道・東北史研究会が開いた函館シンポジウムがきっかけだったかと思います。北海道よりもさらに北方、北東アジア地域まで視野に入れて、北の方から日本史を逆照射しようという研究潮流です。東北中世史研究の画期としては先に触れた『中世奥羽の世界』とともに非常に重要なものです。

それから、同じ時期に中世遺跡の発掘調査が始まって、中世考古学が本格的に展開したのも大きいですね。遺跡の発掘調査としては、平泉の柳之御所遺跡、青森県の浪

岡城、根城がきっかけで、一九八三年に東北歴史資料館（東北歴史博物館の前身）で開催された「東北の中世陶器展」も重要だと言われています。東北中世史考古学会が発足して、毎年大会を開くようになるのが一九九五年です。石江遺跡群、十三湊、聖寿寺館跡、洲崎遺跡、衣川遺跡群、多賀国府周辺、荒井猫田遺跡、陣ヶ峰遺跡などなど、発掘された中世遺跡は枚挙にいとまがありません。板碑など石造物にも関心が向けられています。当然のことながら、『東北の歴史』『中世奥羽の世界』の時期には東北の中世考古学はまだ産声を上げていませんので、その成果が反映されることもありませんでした。考古学では、文献では知ることが難しい生産、流通、交通、生活などに光が当たります。今度の『東北の中世史』は考古学の方にも多数執筆していただいておりますので、新しい成果を提供できると思います。

——北方史や考古学といいますと、最近北海道南東部にある厚真町の宇隆Ⅰ遺跡が注目を浴びていますが。

柳原　すでに五〇年くらい前に掘り出されていた壺を、数年前平泉町の八重樫忠郎さんたちが調査したら常滑焼であることがわかりました。北海道では今までのところ、唯一ですよね。ここに一二世紀の半ばくらいに常滑壺を持ち込むのは、平泉勢力以外には考えられないでしょう。また遺跡のある場所が、平泉付近で経塚ができるロケーションと似ているのです。しかも、舌状台地の先に街道が走っていたり、川が流れていたりと、とてもいい場所なんですよね。だから経塚があって、平泉藤原氏の関係者が常滑焼を持ち込んだのではないかという想定がなされています。

さらに、宇隆Ⅰ遺跡よりもっと奥のほうで、ダム建設に伴う大規模発掘が行われています。厚真町教育委員会の乾哲也さんから何度かご案内いただいているのですが、擦文文化の中からアイヌ文化が生まれ出ようという状況がわかるのだということです。

熊谷　それはおもしろいですね。

シリーズの視点

——ここまでのお話しをうかがうと本シリーズは、〝東北史〟を北東アジア、列島史のなかで描くというのが主要なコンセプトだと理解してよろしいでしょうか。

柳原　はい、『東北の歴史』の段階というのは、東北地方は日本国家の中の一地域というとらえ方ですが、もう今は、東北も地域だけれども日本も一つの地域だし、北東アジアも一つの地域で、地域というものが重層的に、多様にあって、その中に位置付くというスタンスになるのではないでしょうか。もちろん国家の重みというものはありますが。

熊谷　ただし、今までは北のほうから東北を見るという傾向が強く、少し偏っていた面もありましたね。

柳原　中世でいうとたとえば南東北は、関東との関係抜きには考えられなくて、関東も含めて一つの地域といってよい部分があります。むしろ東北の北のほうよりも、関東との関係のほうがずっと強いと思います。

熊谷　それは古代から同じですね。『古代史』の三巻ですと、八戸市の宇部則保さんと福島の菅原祥夫さんが書いておられますが、それぞれ視点が全然違います。やはり福島の菅原さんは、考古学的にも、関東や北陸との関係という視点で書いていますし、宇部さんは逆で、やはり北方との関係です。

さらに話をつづけると、古代の文献史料はやはり六国史が一番多いので、当然のことながら中央との関係が主に出てきます。しかし考古学的な資料を使うと、それ以前から東北南部と関東はずっとつながりがあって、実は移民も来ていたということがわかります。しかもそれだけではなく、今度は会津を介して北陸のほうから東北に入ってくるという流れも一方ではあるということも言っていて、例えばそのような見方が、北方史とは今度は逆に、南のほうで開かれた東北地図をつくっていくことになっていくのではないかと。そのような研究は本当に出始めた段階だと思うのですが、これが本シリーズのセールスポイントの一つで、新たな研究の可能性を示していると思います。

柳原　中世史では、京都と奥羽、関東と奥羽、こうした関係について非常に緻密な研究が積み重ねられています。奥羽だけで見ていても理解できない現象が、京都政界の動向を視野に入れるとうまく説明できるとか。室町・戦国時代をあつかう三巻・四巻で、新知見が披露されることと思います。地域ということでいえば、東北の中世史を描こうとする場合、どうしても陸奥が中心となり、出羽の方が手薄になりがちです。それをどう克服するかも一つの課題で、編者の方には陸奥・出羽のバランスを考えていただくようお願いしてあります。それから、何といっても最初の方でお話しした伊達家重臣遠藤家・中島家文書の発見が注目されますね。二〇〇九年から一一年にかけて、戦国時代を中心とする中世文書が約百点見つかりました。東北地方では、数十年に一度の大発見でしょう。いや、百年に一度かもしれません。調査に参加させていただいたことは、得がたい経験でした。それはともかく、遠藤家文書の場合、宛所はほとんど伊達輝宗、すなわち政宗の父の時代に外交担当だった遠藤基信です。

熊谷　外交というと同盟関係ですか。

柳原　そうですね。そして、南奥羽と関東を一つにした地域圏のようなものが、かなり明瞭に浮かび上がってくるのです。さらに遠藤家文書の中に「惣無事」という言葉が何ヶ所か出てきます。少し前から、藤木久志さんの惣無事令論をめぐる議論が活発になってきていますが。そうした面でも資するところが大きい史料だと考えます。遠藤家文書を手がかりに新しい社会秩序を描けると思います。

熊谷　そうですか。これは、東北だけではなく、戦国期の列島全体の秩序を見直すきっかけになりそうですね。

柳原　ええ。まさに開かれた東北史をやる上でのいい素材ではないか思います。

——話もつきないところですが、予定していた時間をだいぶオーバーしてしまいました。『東北の古代史』『東北の中世史』両シリーズに対し、大いに期待がもてそうです。本日はどうもありがとうございました。

（二〇一五年四月一九日、東北大学にて）